

第34回夏期福音特別集会 (4) (箱根)

天国入門の資格

——マタイ伝第25章1～40節——

1987年8月23日

小池辰雄

聖霊の溶けた実存 本当に生きている キリストの実存 聖霊のバプテスマ 贖われたる無の
 根源現実 平安が来る 自然・霊然・神然 絶対恩寵の故に 無資格無条件 神のみぞ知り給
 う たんぽぽ 一対一の伝道 この聖霊だけ 大肯定 御霊の力

【マタイ25】

1 このとき天国は燈火を執りて、新郎を迎えに出づる十人の処女に比うべし。2 その中の五人は愚にして五人は慧し。3 愚なる者は燈火をとりて油を携えず、4 慧きものは油を器に入れて燈火をともしびに携えたり。5 新郎、遅かりしかば、皆まどろみて寝ぬ。6 夜半に「やよ、新郎なるぞ、出で迎えよ」と呼ぶる声す。7 ここに処女みな起きてその燈火を整えたるに、8 愚なる者は慧きものに言う「なんじらの油を分けあたえよ、我らの燈火きゆるなり」9 慧きもの答えて言う「恐らくは我らと汝らとに足るまじ、寧ろ売るものに行きて己がために買え」10 彼ら買わんとて往きたる間に新郎きたりたれば、備えおりし者どもは彼とともに婚筵にいり、而して門は閉ざされたり。11 その後かの他の処女ども来りて「主よ、主よ、われらの為にひらき給え」と言いしに、12 答えて「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言えり。13 されば目を覚しおれ、汝らは其の日その時を知らざるなり。……

27 さらば我が銀を銀行にあずけ置くべかりしなり、我きたりて利子とともに我が物をうけ取りしものを。28 然れば彼のタラントを有てる人に与えよ。29 すべて有てる人は、与えられていよいよ豊かならん。されど有たぬ者は、その有てる物をも取らるべし。……

31 人の子その栄光をもて、もろもろの御使を率いきたる時、その栄光の座位に坐せん。32 斯て、その前にもろもろの国人あつめられん、之を別つこと牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、33 羊をその右に、山羊をその左におかん。34 爰に王その右におる者どもに言わん「わが父に祝せられたる者よ、来りて世の創より汝等のために備えられたる国を嗣げ。35 なんじら我が飢えしときに食わせ、渴きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、36 裸なりしときに



衣せ、病みしときに訪い、獄に在りしときに来りたればなり」³⁷爰に正しき者ら答えて言わん「主よ、何時なんじの飢えしを見て食わせ、渴きしを見て飲ませし。³⁸何時なんじの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりしを見て衣せし。³⁹何時なんじの病み、また獄に在りしを見て、汝にいたりし」⁴⁰王こたえて言わん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり。」

●聖霊の溶けた実存

今回はマタイ伝25章の有名な譬話です。譬話というものは、

「これは何を意味するか」

といったようなことを一々当てる必要はない。ただ、その譬話のこころをどのようにとるか。その時に示されたままでよろしい。「油」とは何か、「燈火」とは何か、と限定する必要はない。キリストは何もそれを説明していない。

「見る目ある者は見るべし、聞く耳ある者は聞くべし」

と言う。聖霊は「火」に例えられ、また「水」に例えられ、また「油」にも例えられます。聖霊のバプテスマという。バプテスマは旧約聖書ではオリーブの油を使う。

この「燈火」は、私達はここで今日は「聖霊」と思つて読みましょう。では、「油」は何と思ひましょうか。私はこれは「実存」だと思ふ。

「聖霊、聖霊」

と霊のことばかり言つて、日常生活が本当の「油(実存)」になつていなければ、聖霊の溶けた実存になつていなければダメだ、ということであろうと思ひます。

「愚かな者は油を携えていなかった」

ということとは、日常の生活がキリストに即していなかった。そのようなことを別な角度から切々と語つているのがヤコブ書です。

⁵新郎、遅かりしかば、皆まどろんで寝ぬ。

新郎が遅くやつて来た。皆まどろんで眠つてゐる。よく、キリストは

「目を醒ましておれ」

とおつしやいます。詩篇の121篇も、

「エホバは……汝をまもるものは微睡たもうことなし。視よイスラエルを守り

たもうものは微睡こともなく寝ることなからん。」(詩篇121・3～4)

我々を守る神さまは常に目を醒まして皆を守つてゐるという。

皆は待ちくたびれて、まどろんでいた。

⁶夜半に「やよ、新郎なるぞ、出で迎えよ」と呼わる声す。⁷ここに処女みな起きてその燈火を整えたるに、⁸愚なる者は慧きものに言う「なんじらの油



を分けあたえよ、我らの燈火ともしびきゆるなり」

「油を分けてくれ」と。実存は分けるわけにいかない。「買って来なさい」と。買うわけにもいかない。買いに行つたところが間に合わなかつた、と譬話でそういう話になっていますが。

9 慧きもの答えて言う「恐らくは我らと汝らとに足るまじ、寧ろむじ売るものに往きて己がために買え」10 彼ら買わんとて往きたる間に新郎まきたりたれば、備えおりし者どもは彼とともに婚筵こんえんにいり、而して門は閉とざれたり。11 その後の他の処女ども来りて「主よ、主よ、われらの為にひらき給え」と言いしに、12 答えて「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言えり。

最後に、

「汝らを知らず」

では、これはもう、どうにもならん。

● 本当に生きている

13 されば目を覚めしおれ、汝らは其その日その時を知らざるなり。

「目を覚ましていろ」

ということとはただ目を覚まして待つてゐることではない。

「本当に生きている」

ということですよ。いつ最後の日が来ても、

「アーメン、ハレルヤ!」

と言つて、一日を一生として全存在をもつて、躓いても転んでも滑つても倒れても、全的に生きていたかと。これが問題です。そういうことだろうと思われまます。

ところが、本当に聖霊が内住して来るといふと、どんなに破れ器であつても、まことに生きざるを得ない。でなければ、聖霊はどこかへ行つてしまふ。御霊というのは——これは説明がつかない——力だから、そのようにして生きざるを得なくなつてくる。「聖霊プラス実存」ではない。聖霊は実存を伴わざるを得ざるどころの靈なんです。

この花はいろいろな形や色をしている。これは現象です。現象だけれども、この現象は即、本体を現している。聖霊という本体は、即それぞれの現象を現す。現象と本体とが一如の相になる。これが聖霊の世界です。ただし、我々はこの聖霊に完全に即して歩けない。そこに、乱れもあるし、矛盾もある。けれども、必ず御霊がその破れを通して現れてくださる。何分の一であろうと構わない。

「見たところ立派な行為よりも、誠に情け無い姿であるが、しかし、そこには本当の行為がある」

というのが本当の行為です。ですから、この御霊の世界は一如ならざるを得ないところの質を持っている。学生ならば勉強せざるを得ない。楽しいんです。御霊によつて動かされ



ていることは全部楽しい。どんなに辛いことでも、その中に楽しさがある。楽しみを求め
てはダメです。楽しみが伴って来る。嬉しさが伴って来る。シラーが

「人間は遊んでいる時が本当の姿だ」

と言いましたが、この「遊び」という言葉は誤解しないでいただきたい。自然に現れてい
る姿が遊びなんです。無理がない。そういうような事態が御霊の事態です。

要するに、御霊の世界では、為すことやることが偽りでないということですよ。藤井先生が「真
実」ということを言った。そうすると、他人を見て、

「真実、真実」

と言って、

「まことさがない」

だのと言う。真実というものが、一つのお題目みたいになってしまふ。そうすると、これ
はパリサイになる。「真実」なんていうよりか、私は「砕け、あるがまま」と言う。「真実」(ア
レーティア)というのは、

「人間の真実なんか、当てになるか。キリストだけがまことだ」

とパウロが言っている。

「目を覚ましおれ」というのは、

「毎日本当に生きていろ」

ということですよ。

「神の最後の日はいつ来るだろうか」

なんて計算する教派があるね、冗談じゃない。

「汝はその日その時を知らざるなり」

と、知らなくていい。知る必要なしなんです。

「どうぞ、いつでもいらつしやってください」

と。生きることが待つことです。私なんか随分無駄な生き方をしたよ。過去を省みれば後
悔だらけだ。だから、もう少し生きざるを得ない。償わなくてはならないから。

そのような「燈火」(聖霊)とその「油」(実存)。油(実存)が無くて、燈火(聖霊)はいっ
たい灯るんですか。それは無尽の油です。尽きざる油。旧約のエリシアのところに出ている。
あの預言者エリシアというのは素晴らしい。これは本当にエホバの霊の働いている世界で
す。

少し先へ行きましょう。「タラント」の話。お金を預けて出掛けて行ったがそれを銀行に
入れたのどうのこうのと、キリストの譬たとえというのは、なかなか面白いもんだ。いろんなこ
とが書いてある。これを何も活用しなかった者はダメだと言われた。その頃もう、銀行が在っ
たんだね。

27さらば我が銀を銀行にあずけ置くべかりしなり、我きたりて利子とともに



我が物をうけ取りしものを。²⁸然れば彼のタラントを有てる人に与えよ。²⁹すべて有てる人は、与えられていよいよ豊かならん。されど有たぬ者は、その有てる物をも取らるべし。

経済学の本みたいだ。こういう言葉があると、誤解する。また、悪用する。

●キリストの実存

私が今日お話ししたいのは、今のその最初のところと、それから特に終わりの方です。25章31節から。

31人の子その栄光をもて、もろもろの御使を率いきたる時、その栄光の座位に坐せん。³²斯て、その前にもろもろの国人あつめられん、之を別つこと牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、³³羊をその右に、山羊をその左におかん。³⁴爰に王その右におる者どもに言わん「わが父に祝せられたる者よ、来りて世の創より汝等のために備えられたる国を嗣げ。³⁵なんじら我が飢えしときに食わせ、渴きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、³⁶裸なりしときに衣せ、病みしときに訪い、獄に在りしときに来りたればなり」³⁷爰に正しき者ら答えて言わん「主よ、何時なんじの飢えしを見て食わせ、渴きしを見て飲ませし。³⁸何時なんじの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりしを見て衣せし。何時なんじの病み、また獄に在りしを見て、汝にいたりし」⁴⁰王こたえて言わん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり。

キリストは「兄弟」とおっしゃったつて、勿論、兄弟姉妹の意味なんです。

要するに、これは憐憫の心、助けの心です。これはもう、キリストの実存の一端がそこに現されている。食らわせ、飲ませ、宿らせ、着せ、とぶらい、獄を訪ねるといふ。

『天国への入門の資格』と今日の標題に書いた。

「愛を生きなかつた者は天国に入れない」

と仰る。プロテスタントは「信仰によって義とされる」なんて言つて、これをお題目にしている。

「アブラハムは信仰によって義とされた」

とパウロが言った。ヤコブは

「アブラハムは行為によって義とされた」

と言った。実は同じことなんです。ところが、マルチン・ルッターはヤコブ書のその気持ちを取り損なつて、

「ヤコブ書はけしからん、これは藁の書簡だ」

なんて言った。それは、ルッターのあの時の使命としては、「信仰」を一点張りに言わざる



を得なかった。パウロもユダヤ教に対して、信仰を言わざるを得なかった。しかしながら、信仰をもの凄く強調したところのパウロもルッターも、ものすごく行為的な人でした。彼らの信仰が、いかに行為と別つことのできない信、即行であったか、事実が証明している。だから、「信仰」という言葉は、私がしょっちゅう申し上げている通り、「信行」または「信交」と書きたい。これは実は、福音の世界だ。

キリストが

「御意を行う者のみ天国に入る」

と仰った。

「さあ困ったな、そんなに行えないな」

と、こうくるわけだ。心配は要らん。二段構えの考え方をしてるうちは、いつまでたってもダメです。信ずるということが、一番激しい内的な行為なんです。その行為も自分で力んでする行為ではない。圧倒されて信ぜざるを得ない、キリストのところに行かざるを得ない。他にどこに行けますか？ このように驚くべき愛をもって、救い上げてくれた方、贖ってくださった方、永遠の生命を与えてくださる方。その一番中核であるところの聖霊を降してくださる方。これにもう、圧倒されてしまう。

●聖霊のバプテスマ

聖霊の臨み方は一人ひとり、人によってそれぞれです。ただ、私みたいな者はもの凄く天界からの霊に撃たれた。坐っていたら、グーッと身体が持ち上がって、全身がしびれた。

「これが聖霊のバプテスマか!？」

と。しかし、その阿蘇(あそ) (の集会)での体験の後で、マタイ伝の

「恵福なるかな、霊の貧しき者、天国はその人の有なり」(マタイ5:3)

という言が、

「恵福なるかな、我が十字架によつて、霊が貧しくされた汝、天国即ち聖霊の我、汝の中に在り」

と響いた。これが決定的な体験なんです。

阿蘇では、とにかく驚いてしまったけども、しかし、阿蘇の帰りに聖書を読むとベールがとれて、いつたい今まで何を讀んでいたかということが分かった。

マタイ伝5章3節はガラテヤ書2章20節と同じです。

「われキリストと共に十字架せられたり、我もはや生くるにあらず、キリストわが中に在りて生き給うなり」(ガラテヤ2:20)

これは、プロテスタントはお題目にしている。観念で受けとっているだけだ。

「キリストわが中に」

とは何ですか。



「御霊のキリストが、キリストの御霊がわが中に来たりて生き給うなり」と。これは否定することができない。私の側がどうであろうと、そんなことは問題でない。

「わが証人となれ」

とキリストがいわれた。

「聖霊が臨んだら、お前達は地の果てに至るまで、世の末に至るまでわが証人となれ」

と書いてある。使徒行伝で復活のキリストが言われた。そうすると、御霊は愛の霊ですから、今、キリストが言われたこの譬話のような、こういうことが自然にできてくるわけです。

人間はエゴイストだから、そのエゴイズムには戦わなくてははいかん。戦わなくてははいかんが、しかし、その戦いは努力の戦いでない。御霊の中に

「主さまー」

と言って入れれば、これに勝てる。けれども、人間というのは生まれつき、非常に愛の有る人もあるし、なかなか愛の乏しい人もあるし、智恵の有る人もあるし、智恵の足りない人も有る。いろいろだよ、人間というのは。けれども、その人のその人らしきをもって受けて行くとところに、「まこと」ということがあるわけです。

● 贖われたる無の根源現実

しかし、

「キリストはこういうように仰つたが、私は省みてみると、果たしてそれだけ人々を憐れんだか、渴いた時に水をやったか」

なんて、計算するとマイナスになったりして、

「これでは、天国に入れないな」

なんて思う。ところが、キリストと一緒に最初に入ったのは誰ですか。片一方の盗賊だ。とてもこんなのに及第できない。しかし、

「さんざん悪いことをしたから、私は十字架に架けられた。仕方がない。せめても覚えてください」

と、魂が砕けました。しかし、もう片一方は、

「お前は神の子なら俺達を助けたらいいだろう」

なんて高慢に言った。こっちは地獄に落とされる。片一方は天国へキリストと一緒に、

「汝、今日、我と共にパラダイス」

と言われた。

この片一方の盗賊はこの資格の中に入らない。それではどうするんですか、この譬話は。この譬話はこれでいいさ。

「いかにそのような愛に生きることが大切か」



これはキリストが言われた。しかし、キリストの福音の世界はいかなる限定もない。無資格でいい。譬話を破るようなことを、私は言いますが、どう考えても、無資格だ。

「我は罪人の首なり」

とパウロは言いました。こちら側の実存を計算する必要はない。さつきから

「実存、実存」

と言っているけれども。福音の世界はあらゆる条件を超えた世界です。パウロはその世界に入っている、いろんな戒めを言っています。キリストもいろんなことをおっしゃいます。けれども、福音の一番のどん底は無条件の世界です。これは贖われたる無の根源現実なんです。私はどうであろうといい。どんなに非難されようといい。私の根底には十字架が開いた凄惨な世界がある。賜りたる無です。悟った無ではない。禅宗の無ではない。この賜りたる無のところ、聖霊は来ざるを得ない。聖霊がやって来るということが一番根源の現象なんです。

太陽の光がこれを貫くから、花がこのように美事に咲く。百花繚乱というわけです。皆さんは一人ひとり、天下一品に造られている。御霊が入って来ると、それが本当に花咲き実が稔る。皆、自ずから神の栄光、自ずからキリストの証しということになるので、こちら側を省みる必要はない。

「資格にして資格にあらず」

ということですよ。

「これだけのことをしましたから、入れてください」

なんて言う必要はひとつもない。

「できませんでしたから…」

と言つて情しよげなることもない。それが無であつて、砕けの世界なんです。キリストの十字架で砕かれたる魂です。自分で砕けたのではない。

「砕けたる魂を喜ぶ」

と詩篇の51篇にあるけれども、人間の自分の砕けなんでもものは当てにならない。キリストが砕いてくださった、キリストが与えてくださった無である。そこで「ざるを得ない」で動いて行く。ざるを得ないで動いて行くんだが、いろいろな人間の性格で、そのざるを得ないがどれだけ現象するかは、その人によつていろいろだ。いいよ、そんなことは。詩篇139篇の、

「汝知り給う」

です。キリストは我々一人ひとり、いかなる人間も知らない知り方をしていらつしやる。キリストの知は、憐憫あわれみの知です。批判の知ではない。旧約聖書のこの「知る」という言葉は素晴らしい深い言葉です。ことにホセア書がそうです。エレミヤがそうです。ホセア、エレミヤは愛の預言者だが、これが「知る」という言葉を使っている。本当に憐憫をもつて、



「愛をもって全存在で相手を知る」
ことを「知る」という。キリストの知り方はそういう知り方です。

●平安が来る

それで、本当に平安が来る。ダンテの『神曲』の天国篇の第三曲(81行)に、
「神さまの御旨の中に自分を置くことが、この恵まれた者の本性である。天国の段階から段階へとこの天国に我等の居るは、神さま(キリスト)の意志の中に我等を意志せしめる神さま並びに全天国のところに叶うのである。また、彼の意志は我等の平安である」とある。

「キリストの意志の有る処に我々の平安がある」

とは有名な一句です。

「汝の意志の有る処に我らの平安あり」

という言葉です。この「平安」という「シャーローム」という言葉はユダヤ人の挨拶の言葉で、「こんにちは」でも「さよなら」でも何でも、シャーロームという。

「平安が貴方にありますように」(シャーローム ラケム)
という。
「汝の意志の有るところ」

というのは、これは神さまの憐憫の心だから、そこに平安がある。だから、山上の垂訓の、

「恵福なるかな憐憫ある者、その人は憐憫まれん」

という、あの言葉は一番深い。第一言はすべてにかかって来ますけれども。平安がまた力です。平安は喜びであり、力である。

「平安」という言葉は、ギデオンの士師記第6章のところにでてくる。

「ますらたけお剛勇丈夫よエホバ汝とともに在す」(士師記6・12)

エホバがお前ギデオンと一緒にいらつしやるから、怖がるなと。

「エホバこれにいたまいけるは、心安かれ怖るる勿れ、汝死ぬることあらじ。

「ここにおいてギデオンかここにエホバのために祭壇を築き、これをエホバシヤロームと名付けたり」(士師記6・23～24)

「心安かれ」とは「平安あれ」ということです。これが最初に出てくる言葉です。

「エホバはわがシャーローム(平安)である」

と。或は「シャーロームの神」という意味です。「平安の神、平安を与え給う神」というわけです。

●自然・靈然・神然

人を助けたり、助けの内容はいろいろありますが、みな具体的なことです。聖霊は愛の



力だから、そのように働いて行くわけです。力ある愛だから。愛はただ感情ではない。パウロは

「福音は言葉にあらずして力なり」

という。「愛の力」「力の愛」と言ってもいい。「行為、行為」とキリストは言われるが、「私を受けとれば、そういうような力が現れるぞ。それが言葉と成ったり行為と成ったりするぞ」

ということですよ。何か、律法的に道徳的な命令のように思ったらダメです。全部、霊的です。それを「霊然」と言いたい。

自然霊然という。

「自然・霊然・神然」

という言葉は著作集第九巻『感想と紀行』にも書いた。大自然は自然である。これはみな法則の世界です。全部、「ダルマ」の世界。「法」という字は

「水は低きに流れ去る」

ということから来ている。物理法則だ。そういうのが自然なんだ。法は実は「自然」という字なんだ。水は低きに流れ去る。上へ昇って行く水があるか？

要するに、流れるということはみな低きに流れる。これが自然の姿。しかし、それは物理法則の世界です。断崖の松でも、あの姿が自然なんだ。人工的な美よりも、何と言ったって、自然の美にはかなわない。この自然の美しさを

「ソロモンの栄華もこの花の一つに及ばない」

とキリストが言われた。

道徳法則というものもある。カントは、道徳の法則と天然の自然の法則が素晴らしいものだから、

「これを思えば思ふほど、自分は驚嘆と畏敬の念をもってこれを思わざるを得ない。そ

れは頭上の星辰の空とわが中なる道徳の法である」

という有名な言葉がある。『実践理性批判』の一番終わりに出てくる。道徳のことを言いたかったら、カントの『実践理性批判』は一応読まなければならない。「観念、観念」と言うけれど、カントは単なる「観念」ではない。

「誰も行えなくとも道徳法則は厳然としてある」

という。

御霊に入ると、私達は第二の自然になる。それは霊然という世界です。本当のクリスチャンはどこでも世界中、みな霊然でなければならぬ。

キリストになると、これは「神然」なんだ。キリストは神と一つになっているから。神然たる霊止ひとはキリストのみ。キリストは我々のことを

「神々と言つて何故わるいか」



と仰った。そういうことも詩篇の中に出ている。

●絶対恩寵の故に

ヨハネ伝の中にも出てる。キリストは、

「我と父とは一つなり」

と仰った。我々は、

「我とキリストとは一つなり」

です。絶対恩寵の故に、というんですよ。

「だいぶん実存が良くなつたから、だいぶ一つになって来ました」

なんて、そんなことを言っているのではない。

「絶対恩寵の故にキリストとは一つでございます」

ということ。この「一つ」が言えなかつたら、力は来ない。

「普通の民族宗教は上なるものに対する畏敬の念。哲学的な宗教は同等なる人に対する

畏敬の念。おのれより低きものに至る僕しもべの世界、これがキリスト教だ」

と、ゲーテが『ヴィルヘルム・マイスター』の終わりの方で言っている。

「けれども、もう一つある。それはわが中なる靈こころに対する畏敬の念」

とゲーテは言った。これは全部渾然こんぜんとしている。ゲーテはそういう人なんです。「わが中なる靈」ということは、

「人は神の似姿に造られた」

という言葉。これはゲーテの好きな句です。

「神の似姿」(エーベンビルト・ゴッテス Ebenbild Gottes)

という。ゲーテは、

「人は神と同じ相に造られているとあるではないか。人は本来は神と同質なんだ。

その靈に対する畏敬の念を持って」

ということ。私達にとっては、この靈が損なっているから、聖靈が来る。

「わが中なる聖靈に対する畏敬の念」

ということ。そんなことはドイツ文学者の誰も知らない。言わない、言えない。この

聖靈の世界を持たないから。

「エン・クリスト」(EN XPISTO キリストの中に)

というのがこれなんです。「エン・エモイ」(我が中に)なるキリストということ。パウロがさんざん言っている世界がそこではないですか。パウロがなぜ凄いかというと、この世界を持っていたから、この世界に入れられていたからです。コリント前書11章にあるような百難を突破した。これは本当にたまらんです。



●無資格無条件

だから、これを持っていることは、我々の側の如何なる資格でも何でもない。誰でもが無条件にこの御霊を頂く。無資格である。

「お前はだいたい善くなつたから、御霊をやろう」

なんて、そうではない。

「お前はでたらめだね、いいよ、聖霊をやるから。ただ、その前に私の十字架を受

けろ」

ということです。

「十字架・聖霊」

というのは、私はこういう印(○の中に十)

⊕

を書く。聖霊は円です。相対的な判断は、私には一つも力にならない。ある絶対的なところに来ないという、どうにもならない人間なんだ。だから、絶対恩寵です。十字架も聖霊もみんな絶対恩寵の世界です。こちら側の何ものでもない世界。無条件に頂ける世界。無資格で頂ける世界です。

「天国入門の資格」

なんてのは本当は要らない。逆説的な言葉ですから。資格は一つも要らん。

「ただ、私はあなたを受けとらせていただきました。躓いたり転んだり倒れたり滑

つたりしました。しかし、あなたのところの他にいくところはあります」

と言うわけです。けれども、神さまは皆さんにその破れ器を通して、自分でも驚くようなことをしてくださる。

生まれつきの私は臆病者の弱虫の「ずくなく」だったが、それが変えられてしまったんだから、仕方がない。変えられたということを告白するよりか仕方がない。証あかしということだけです。

そして、いろんなことが見えて来る。何を見ても聞いても、それがみんな、キリストの福音の光でもって変質される。そして、如何なるものも排斥しない。サタンだけは困るけれども。全部、救い上げていく。仏教であろうと、何教であろうと、およそ偽りのないものは全部受けてしまう。パウロもそういつたことを言っている。だから、福音の世界は広大無辺な世界なんです。一切を担い上げて、一切を包み上げてしまう。

私はそういう天国を書くつもりです。東西古今にわたって、宇宙的な空間において。たまらんです。

「もし、このいと小さき者をいいかげんに扱ったら、どっこいということだぞ。知らんぞ」

と、キリストはそういう厳しさをもって言つてらっしゃる。



●神のみぞ知り給う

それでは、どういう答案を書きましようか。答案は書けない。歴史そのものは、宇宙そのものは全部、神秘的ドラマです。我々人生そのものがドラマです。神のみぞ知り給う。平伏して進むよりか他にない。

「こうやれば天国に入れそうだ。こうやれば落つこちそうだ」

なんて、そんなことは一つも要らん。そういう判断は一つも要らん。キリストはただ、

「どんなに善きことをし、偉そうであっても、どっこい、小さな一人を侮あなどつたら

ダメだぞ」

という。これは羊と山羊の譬話のキリストの御意が、いかに小さき者、弱き者、悲しめる者をキリストが憐れみ給うことであるか、ということです。

だから、黙示録にも出てるでしょ、権力者がみんなひっくり返ってやつつけられる。この世で栄えた奴、暴力を使った奴、悪巧みをした奴、そんなのは皆ひっくり返ってしまう。

日本人の魂の教育は大変だ。福音を頂いた者はそのことを証して行かなくてはいかん。聖霊は驚くべき智恵を持っている。聖霊は驚くべき力を持っている。聖霊は驚くべき愛を持っている。あらゆるものをもつて聖霊はその人を通して働き給う。賜物たまものは様々です。

「御霊なき者はキリスト者にあらず」

とパウロが言った通り。資格ではないけれども、天国に入るのに聖霊だけは携えないところは困る。

「お前は聖霊あるか？」

とはキリストは仰らない。全実存を見て判断なさると思います。「キリスト」の「キ」の字も知らない人が天国に入る。聖書をよく知っている人が、

「どっこい (ダメだ)」

といって入れない。誰か知らんや、神の審判さばき誰か知らんや。仏教徒であろうと、回教徒であろうと、何教徒だつていい、

「それが本当の人間か」

ということだ。宗教を鼻に掛けたような奴はダメだ。もう、言葉では説明できない。

天国の資格は、在れども無きがごとし、無けれども在るが如しということ。

『『入門の資格』なんて先生はつまらない題を書いた」

と。本当につまらないよ、こんな題は。

「入門の資格は、落第生が入って行く。いわゆる及第生は入れない」
なんてなわけだ。

このような読み方を、私達には、御霊の力と愛と光と智恵でできるわけです。私はただ簡単になるので困る。



● たんぽぽ

マタイ伝の13章。ルカ伝は「神の国」だけれども、マタイ伝は「神の国」と言わないで「天国」という。

「視よ、種まく者まかんとて出づ。まくとぎ路の傍らに落ちし種あり、鳥来りてついばむ。土うすき石地に落ちし種あり、土深からぬによりて速やかに萌え出でたれど、日の昇りし時やけて根なき故に枯る。茨の地に落ちし種あり、或いは三十倍の実を結べり。耳ある者は聴くべし」(マタイ13・3～9)

人間は、生まれつきの環境、運命があります。

「どうして俺はこんな家に生まれたか。こんな環境に生まれたか。こんな頑固な親の子供になったか」

なんて、いろいろあるわけだ。そして、運命環境に責任をきせるわけです。それは運命環境にも責任がありますよ。

「神さまは不公平だ。神さまはあるのになぜこんなに不幸なんだ」

なんてなわけだ。

キリストも、こうやっていろいろ後で説明してらっしゃいますが、それはそれで勿論承りますけれども、聖霊がくると、それが、茨があるうが、路の傍らであろうが、どこだっていい。

私は『たんぽぽ』という詩を書いたでしょ。あれは、ちょっと不思議な詩ですから。

『たんぽぽ』

コンクリートの道端の

われめの中に根をおろし

ギザギザ葉つ葉をうち拵げ、

黄色にかがやくタンポポよ！

旺盛な生命のタンポポよ！

焼きつく日中も何のその、

誰が水を遣るでもなしに。

おまえに負けるよ人間どもは、

運命環境に愚痴を言つ。

タンポポよ、おまえはやがて

真白な羽を身にまとい、

実を軽々と風に乗せ、

飛んだり着いたり、また飛んで、

自由に天地を渡り往く。



(著作集第九巻『感想と紀行』162頁)

私は時々タンポポを見る。本当にコンクリートの割れ目から咲いている。これは

「路の傍らに落ちた種」

だ。このタンポポはキリストの譬話を破るようなことをやっている。泥沼の中の白蓮の花もそうだ。運命環境の故にどうのこうのと言うのは、これは生まれつきの我々のこと。聖霊が来ると、それに打ち勝つ。それが艱難なところであればあるほど、逆に聖霊は働き給う。だから、キリストのこの譬話を破ります。

「そうだ」

とキリストは仰ってください。

芸術の世界であろうと、事業の世界であろうと、政治の世界であろうと、昔から本当に苦難と戦った人がある。エイブラハム・リンカーンなんかそうだ。リンカーンの伝記なんか読むと涙が流れる。中学の二年の時に読んで、私は涙を流したことを覚えている。丸木小屋の一室一棟だ。そこでリンカーンは育った。

大体今はあまり物がそろい過ぎてしまつて、小さい人達が鍛えられない。私は正直齒がゆるくなる。小学校の先生が甘すぎる。ただ「叱れ」というのではない。厳しさと本当の優しさと両面が自在に展開していくような教育の仕方。それは教育者自身が福音を持たなければできない。宗教心を、本当の意味で持たなければダメなんだ。学校で特定の宗教を教えることができないとしても、先生が宗教心を持たなかったらダメなんだ。

文学の世界ではお伽噺ときぼなしが「アルファでオメガ」(始めて終り)です。ケーベルさんがそう言っている。だから、アンデルセンのメルヒェンだの、イソップのお伽噺が大事なんだ。ああいう世界の最高の第一流の文学を読まないで、マンガばかり読んでしょうがない。

日本のお母さん達が——何もお子さんがなくてもいい——女性が第二の国民を本当に育ててくださらなければ。魂の教育は女性がやるんです。男は働いているからダメなんだ。偉大な人たちのお母さんは、みんな魂が素晴らしかった。ほとんど例外ない。伝記を読むと分かる。ゲートルのお母さんも素晴らしい太陽みたいな人だった。天国に行くと女性上位というわけだ。男は威張つてばかりいるから、

「どっこい(だめだ)」

というわけだ。

だから、運命環境に関わらず、御霊の力で、有り難くてしょうがない。かこつことくなる。

「よし、来た」

と、絶対に行き詰まらない。

あなた方は、いきなりこの十字架・聖霊の世界に入ってしまったんだから、これは大変なもんだ。この『たんぽぽ』の詩みたいに運命環境に負けないで行ってください。羽でもつ



てスーツと飛んで行く。

●一対一の伝道

「天国は一粒の芥子種からしだねのごとし、人これを取りてその畑に播まくときは、よろずの種よりも小さけれど、育ちては、他の野菜よりも大きく、樹となりて空の鳥きたり、その枝に宿るほどなり」(マタイ13・31～32)

種が根を下ろすと、幹が出て来て、枝が生えて、葉つ葉が付いて、花が咲いて、実が稔るといふわけだ。

「天国は芥子種からしだね一粒の如し」

と。これも「一」だ。二粒なんて書いてない。「一粒の種」というと、あのブレイクの詩を思い出す。

「二粒の種の中に宇宙が宿る」

という。聖霊が来ると、宇宙的な人間になる。あなた方お一人お一人はそういう「一粒の芥子種」です。

キリストのこの譬話に真似て言うならば、

「一対一の伝道をしなかつた者は、どっこい天国に入るわけにはいかない」

ということです。私がこの13章で今言おうとするのはそのことなんです。福音を受けたら、この芥子種のごとくに展開していく。また、一粒の稲のように、これが何百倍に増えていく。だから、この福音を受けとったならば、どうしても、生涯を通して人に伝えていく。一年に一人で、結構です。生涯を通して一人でもいい。とにかく、人に伝えないでそのままだったら、

「これはちよつと天国は待て」

ということだろうね。それくらいのこととは思ってください。律法ではないけれども。

「一生懸命やりましたが、とうとう一人も救えませんでした」

と、いいよそれでも。本当に一生懸命にやったのなら。結果を言っているのではない。心を言っている。

●この聖霊だけ

「天国はパンだねのごとし」(マタイ13・33)

これは、ひとつの解釈の仕方があって、

「下手すると悪い増え方になるぞ」

ということの譬たとえになる。「麦と毒麦の話」もある。

「麦と毒麦は大いに生やしておけ。最後には、インチキなものは皆焼かれてしまうぞ。今からそんなにあわてて判断しなくてもいい」



と。まあ、ドラマだね、本当に。

「天国は畑に隠れたる宝のごとし。人、見出さばこれを隠しおきて、喜びゆき、有^もてる物をことごとく売^もりてその畑を買^もうなり」(マタイ13・44)

キリストもなかなか悪智恵みたいなきことを仰つしやるけれども、「隠しおき」だつてさ。

「また天国は良き真珠を求むる商人のごとし。値たかき真珠、一つを見出さば、往^もきて有^もてる物をことごとく売^もりて、これを買^もうなり」(マタイ13・45)

この「有^もてる物をことごとく」が大事なんです。隠そうが隠すまいがそんなことはどうでもいい。ということば、

「他の物は一切顧みずに」

ということ。売^もつたつて売^もらなくたつていい。そんなものは、有^もれども無^もきがごとしと。そんなものは顧みずに、

「この聖霊だけだ、福音だけだ。キリストだけだ。それが本当の天国だ」

ということばです。相対的なものにこだわらなくなる。与えれば与えるほど、宝は天に積む。私みたいに80才を超えると、なおさらそういう気持が楽になってくる。

「勝手にしやがれ」

と。

イザヤ書の61章に、

「主エホバの霊われに臨めり。こはエホバわれに膏^{あぶら}をそそぎて貧しきものに福音をのべ伝^{とら}うることをゆだね、我をつかわして心の傷^{いた}める者をいやし、俘^{とら}囚^{われ}にゆるしをつげ、縛^{いまし}められたるものに解放^{とぎ}をつげ、²エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告げしめ、又すべて哀^{かな}むものをなぐさめ、³灰にかえ冠をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ、悲^{かな}哀^{しみ}にかえて歡喜^{よろこ}のあぶらにあたえ、うれしいの心にかえて讚美の衣をあたえしめたもうなり。かれらは義の樹^きエホバの植えたもう者その栄光をあらわす者ととなえられん。」(イザヤ61・1～3)

素晴らしい言葉だね、この61章の始めのところは。これが福音の世界で、このようなことになると。御霊の働きはこのようだぞ、ということばです。とにかくイザヤ書というのは凄^{すご}い。

●大肯定

この「隠れたる宝」であろうと「真珠」であろうと、みんなこれはキリストであり、聖霊である。

「他のものはみんな要らん。捨^すててかかれ」

「我よりも何々を愛する者は我にふさわしからず」



と。あんなことを言うもんだから、昔は日本では

「普通の道徳に反する。国民道徳に反する」

なんてやってるんだ。そうではない。

「そんな相対的なものをとやかくと考えていてはダメだ。絶対者に直面しろ。そう
したならば、その力が、その愛が、今度は、捨てたと思つた者たちを全部救い上
げてしまうぞ」

ということですよ。いいですか。いろんな悲しいことに遇つたり、いろんなことがあつても、
逆にこれが聖霊の恩寵が働くところだと思つて、大肯定をして進んでください。

だから、みんな驚いた。

「……人々おどろきで言う「この人はこの智恵とこれらの力とを何処いずこより得し
ぞ」

これは、私達がそうなんです。「この人はこの智恵と力を何処より得しぞ」と。

「キリストから来ました。その中核は聖霊でございます」
ということですよ。

「これ木匠たくみの子にあらずや、その母はマリヤ、……」
これは躓つまずいている。それで、キリストは出てしまった。ちゃんとその通り書いてある。

「変な野郎だなあ」
なんて皆に言われて。

「預言者はおのが郷さとおのが家の外にて尊ばれざる事なし」(マタイ13・54:57)

と。家の中では尊ばれないと言う。いわゆる一番肉的に親しい者はなかなか受けとらない
というわけだ。

信仰の世界は血族にあらず。一人ひとり神・キリストに直結する世界です。もちろん、
親から受けとつて、入りやすい人もいます。それはいろいろです。

要するに、人生も歴史もみんなドラマです。自然界そのものがドラマの場なんです。そ
の混沌たる、或いは説明のつかないところのドラマの中で乗り切っているのがこの聖霊の
力、御霊の愛の力だけです。

もうはつきりしました。大丈夫です。なにしろ、五つのパンと二つのお魚で五千人も満
腹させて、余すような驚くべき人だから。大変なものだ、キリストに働いているこの聖霊
というものは。無限無量の質を持っている。そういうことを普通は言わならしいね。い
わゆる注解書よりかダンテの『神曲』でも読んだ方がよっぽどいい。

要するに、そういう意味で、

「我々救われた者は大いに他の人を救いなさい」

ということですよ。この集会をやっているのは本当に、

「悩める者・苦しめる者・求める者・悲しめる者にこの福音を語つて、いわゆる正



常人よりもつと凄惨な世界に入れてやろう」という、そのためであります。

●御霊の力

これがマタイ伝の13章なんです。マタイ伝は言の福音ことばであります。その言が

「わが言は靈なり生命なり」

であって、単なる言葉ではない。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネは渾然こんぜんとしていますから、いわゆる線なんか引けませんけれども。「言は力なり」なんだ。パウロは、

「言にあらず力なり」

と言ったけれども、キリストにおいては

「言は力なり」

とすることが出来る。死人を甦らせるようなひとだからね。

「起きよ！」

と云えば、死人が起きてしまうんだから。

しかも、ペテロもパウロもヨハネも実際にやっている。特にペテロとパウロのことが使徒行伝に出ている。あれは皆、言葉が、力の世界が現れている。それが、囁くささやくような言葉であろうと、何であろうと全部、力が入っている。

病気のひとに祈る時は、先ず、その人の一番中心に、キリストの生命が、御霊の生命が来ることを祈る。病の現象の面ではない。奥の世界です。そうして、そこを本当にグーッと祈り込んで、そこから

「主様！ どうぞこれを癒いしてください」

と祈る。ただ癒しを求めるのではない。その人の中に御霊の力が入って、生命が流れ出したら、内側から治って行く。根源の現実なんです。そこから治って行く。そうして、治された状態を念じながら、即現在として祈っていくことです。それが、その瞬間において、聞かれようが聞かれなからうがいい。それは必ず結果して行きます。その人によって受け方がいろいろだから。こちら側はその線をもって進んで行く。

福音を受けとらない頑固な者がいる。そういうのは人生のどこかで、電信柱にぶつかって額から火の星みたいのが出て、それからやつと、

「これはいかん」

と気が付くわけだ。人間は失敗したり、躓いたり転んだりしないと、展開しないように情け無くできている。スーッとなんか行かない。

私達は、このマタイ伝を、ごく一部分をこうやって食らいましたけれども、これがいかに、いわゆる言葉でないかということに気がついたわけです。

「言は力なり」



ということに気がついたわけですから。キリストの権威ある言、
「**恵福なるかな、霊の貧しき者、天国はその人の有なり**」
と。

「天国は汝の有なり」

という、力を持った言です。その言の現実の中に自分を入れるわけです。入れると貧しくされてしまう。天国がやって来てしまう。

「はあ、そうですか」

ではない。

「どうすれば、そうなるか」

ではない。言の現実の中に自分を投げ入れると、言の力が働く。そんな読み方は普通はしない。私は、ものを言うのは、その中からものを言っているの、外から説明しているのではない。

とにかく、大変なもんだ、キリストは。聖書がなぜ万巻の書と違うかというのは、そういう神の力を持った言の書だからです。思想ではないんだ、救いの現実なんだ。救いの光なんだ。救いの愛なんだ。闇を光に変える世界です。

レンブラントの絵は随分暗い所があるが、どこか一角から光が射してる。あの光が闇に勝つ。レンブラントやダ・ヴィンチに負けないような画家が出て来ないかね。

聖書は本当に、まあ何という書かと思う。聖書自身が大ドラマだ。闇を光に変えんとし、罪人を神の国の人に変えんとしている。黙示録では大讃歌のうちに、最後の新天地を望んで進んで行くところの、我々は旅人であります。地上の旅は序曲に過ぎない。

「…百歳にて死ぬるものも尚わかすとせられ、百歳にて死ぬるものを誣れた

る罪人とすべし」(イザヤ65・20)

だつてさ。まず凄いことが書いてあるね。

どうぞ、あなた方も、何も百歳を突破しろと言っているわけではないけれども、何歳であらうと、もう百歳を突破したような生き方をしてください。

「年齢は問題にあらず、私は永遠歳です」

なんてね。死んでも死にませんから。これはキリストが言っている。

そういうわけで、我々は、マタイ伝のごく一部分にかじりつきましたけれども、そこから、「キリストの言は生命であった、力であった、光であった、愛であった」

ということ、どこを読んでもこれにぶつかって受けとり、アーメン・ハレルヤです。

